

ブック

本書は、英語学、社会言語学、言語政策の専門家である著者が、ヨーロッパ諸国における言語使用について、歴史的観点（言語

史）を縦軸にし、言語政策や社会、文化を横軸にして、ヨーロッパ諸国の様々な階級・家庭・移民等の言語環境や言語使用状況を論じている。また、EUと言語、現代の

多国籍企業や高等教育での教育用語等における「英語」の役割や機能等の課題についても以下の様に分析している。

グローバル化した現代社会において、英語は国際共通語としての地位を担っている。国際共通語は、政治、経済、交易、文化などの面で多くの機能を担い、多くの話者集団をまとめ上げていく。1945年以降、国際機関が増加し、その多くはヨーロッパに設置されているが、その大部分の組織では、公用語として英語とフランス語が使用されている。



多言語世界ヨーロッパ 歴史・EU・多国籍企業・英語

クロード・トリュショ 著
西山教行、國枝孝弘、平松尚子 訳
2860円 大修館書店
☎03-3868-2211

しかしながら、1970年代頃から英語がヨーロッパでの国家間のコミュニケーション言語として使用されるようになり、小学校では、北欧諸国の広い範囲で、連合王国とアイルランドを除く全てのEUの国が英語教育を実践している。さらに、EUの行動計画大綱の策定は英語のみで行われたり、公的な発言に

おいても英語が最もよく使用される等、これまでフランス語で支配されていたところが英語使用へと変化し、英語に対する価値観も向上している。一方、こうした「英語化」によって生じている問題として、①社会生活への影響や経済的影響、②教育機関において、グロー

バル・コースやグローバル教育の媒介語として英語だけが選択されること、③知の表現と伝達の言語としてのドイツ語のレベルの言語教育と比較して教育レベルが低下すること等、多言語世界の地であるヨーロッパに国際化のプロセスとして英語が入り込んでいく課題を挙げている。（愛知教育大学教授・高橋美由紀）